

憲法を起草する会 令和3年6月19日



おやじより

今回ぐらいまでは、具体的な中身というよりは、基本スタンスのところをもう少し詰めていきたいと考えている。

日本國の規範を定めるために、憲法では、どういう事について述べるのが良いかということについて議論したい。

ちなみに、現行憲法は以下のような章立てになっており、章別に、それぞれについて規定がある。

▼現在の日本国憲法の構成

前文
天皇
戦争放棄
国民の権利義務
議会
内閣
司法
行政
地方自治
改正
最高法規
補則

今日、議論したい事は、

- このような構成の部分に触れるのか
- 何を価値規範として定めているのか ⇒ 日本について国民が一致した考え方に立つ起点は一体何なのか(前文に書いてあるような内容)

上記のような事柄について、形態は問わないし、自由な議論をしていきたい。

自由な議論は苦手だと思うが、誰かが最初に意見を言ってくれると考えがまとまっていくと思う。

●参画者

神話を含めた歴史が、伝統的規範には外せないのではないかなと思う。

さっき荒谷さんが言われていたように、伝統的な考え方は成分化しにくいということがあるが、少なくとも神話から始まる近現代の歴史は記載する必要があるのではと考えている。

神話などは、もしかしたら事実とは異なる点もあるかもしれないが、歴史として書くべきではないと思う。

自分の知っているレベルは、最近読んだ「お父さん、日本のことを教えて!」という本なのだが、そこに書いてある事ぐらいはベースとして知っておく必要があるように感じる。

●おやじ

ちなみに、それを文章で書くかどうかという、議論があっても良いかなと思う。

神話伝統を含む歴史というのは、外すべきではないのではないかなという意見ですね。

●参画者

そこがなくなると、日本を語れなくなるし、そうすると天皇も語れないので、絶対的に必要。そういう意味では天皇についても語るべきだと思う。

●参画者

憲法を起草する会は、今回で三回目ということだが、今回、始めて出席させていただいた。

主題は、「書く」ということだろうか。我々が書くことによって、憲法を創造するのではなく、我が日本は既に憲法はある。

ミケランジェロは「私は女神を創るのではない、この石の中に女神があるのだ。それを見つけ出して掘り出していくだけだ」と言っている。

立憲主義にこだわり、憲法にこだり、王の首を切って唱えたのが立憲主義。西洋の歴史はそれであり、日本も明治維新でそれに習ったが、長い人類の歴史の中で、文字に起こして書いた憲法は、ここ最近の事でしかない。

日本という国こそ、憲法は、自分達が作るものではなく、「元々あるものを見つけ出すこと」だと言うことに気づかなければならないと思う。そもそも、現行日本国憲法と題する文章が、日本の憲法だと錯覚している事自体、考え直さなければならない。

二年前、石川県の護國神社で大東亜聖戦の祭に参加した。「全英霊がこの場に下りてきている」と、神主が言った時、本当にここに英霊達が下りて来ていると感じた。

その時、戦争で三年間捕虜で抑留された恩人が「國に帰って来て、ふるさとの駅に降りて外見た時、本当に日本は負けた國なんだと実感した。若い娘が、若いアメリカ兵の腕に、パンパンになってすがりつくように楽しそうに歩いていく。それを見た時、涙がでた。」と言っていたのを思い出した。

全英霊が下りて、今の日本を見たときになんと思うか。「敵が作った日本国憲法と題する文章を、我らの文章として生きている我々は、アメリカ兵の腕にしがみついて歩いている娘より、卑劣ではなからうか。」と思った。

それ以後、日本国憲法を、「日本国憲法と題する文章」と呼んでいる。

アメリカ軍により、現行の日本国憲法と題する文章は作られたが、自分たちの國に憲法は無いのか？と言われると、脈々としてあると感じている。それを見つめていないだけ。

それが顕現したのが、現上皇陛下の譲位のご用命と、それを実現するまでの間の、我が國家が唯一持っている皇位継承の神事。それは、今上天皇が天照大神と一体になる儀式であり、現人神になる儀式。まさに脈々と受け継がれてきていると思った。

今日のおやじさんの話は、上記の事と憲法と題する文章を比較したお話で、とても勉強になった。

神武天皇の建國の勅は、ギリシャのアポロの神託と同時期に発せられた。ギリシャでは、キリスト教の侵略によって、記憶を根絶やしにされているが、我々はキリスト教に侵略されなかった唯一の國である。

アポロの神託と同時期に発せられた我々の詔勅。これがあるから日本が日本で在りうると、もっと強調しなければならないと思っている。

●おやじ

既にある日本文化などを、どのように國民が共通認識できるようにするかということ。それが文章なのか文章ではないのかわわからないが、新しく書くということではなく、元々あるものを認識するということですね。

●参画者

放っておいても、いざとなったら出てくるのではないかとも思う。東日本大震災の時の大教訓は、「アホな大将、敵より怖い」という事。当時の大将は、菅直人。自衛隊はあれを無視したからよかったと思う。

いざとなったら放っておいても、全自衛隊、ひいては、全日本人が特殊作戦群の一人になるようにも思う。いざとなったら、命を掛ける日本人が、きっと出てくる。

●参画者

お話を聴いていて、やはり憲法の前文があった方がよいのではないかと思います。

会社だったら、存在意義のようなものとして、経営理念がある。そして、ビジョンがあって、方針、年間スケジュールと、具体的に流れていく。

日本人は、縄文時代から八百万の神様や自然と共生して、在所共同体として生きてきた。「宗教」と言う人も居るかもしれないが、八紘為宇や歴史、日本人として大切にしてきたものを知っておく必要があるのではないかと思う。だからこそ、前文にそのようなことを記載する必要があるように感じる。

日本人として「こういうものだ」という、大前提のものが前文に書いてあり、そこから憲法が始まった方がイメージしやすくて良いのではないかと思った。

●おやじ

今の憲法は、前文と章立てという構成になっているが、章立ては要らないのではないか、前文のようなものだけで良いという議論も良いかもしれない。

いずれにしても、やりたいのは、これまでの日本人の生命共同体として、起源から導かれてくるところの共通認識が必要だという事ですかね。

●参画者

歴史以外で言うと、教育も書くべきではないだろうか。子供達に何を教えるのか？という事。

教育勅語も良いかと思うし、今の教育基本法というのも、最後の方には良いことが書いてあると思った。未来を創る民(おおみたから)として、子供達をどう教育するのかというのも大事だと思う。

生涯教育とかそういう事ではなく、日本国民として受けるべき学びが記載されている必要があるのではないかと思う。

●参画者

明治になってからも、昔寺子屋でやっていたことを、小学校などで教育としてやっていたから、規範教育がしっかりしていたのではないかなと思う。

共同体の中で生きていく為に、「こうしないさい」という事が各家庭で教えられていただろうし、学校の先生からは「親孝行しなさい」ということや、「弱い者いじめをしている人が居たら、弱い人を助けなさい」と言われていたのではないかなと思う。例えば、東北の方での「十訓」等。

日本人としての生き方を共同体で教え合っていたからこそ、無秩序になった時に、奪い合ったりしないのではないだろうか。

子供達にそういう事を言うのであれば、大人もしっかりしなければならないという戒めでもあるし、そのような良い循環があったのではないかなと思う。今の日本にも、これからの日本にも大切な事だと思う。

●参画者

前文に何を書くかの問題だが、和歌を書くべきではないかなと思う。今だったら、「君が代」と書きたい。

和歌というのは、短い文で、一音一音で想像力と感性を掻き立てる。一音一音がはっきりしている言語というのはやはり珍しい。

それが日本人であり、言葉が最初に来る事によって、想像力を掻き立てる美しいリズムになるのではないかな。

では何を和歌でもっていくのか？「君が代」だったら国民全員が合意できるのではないかなと思っている。

●参画者

今の日本国憲法を読みたいかと言われると読みたくないと思ってしまう。
大切なことは、シンプルで少ししかないと思うので、個々の頭で考えさせるようなものが良いのではないかなと思う。

規則とかルールを作って行くと、どんどん増えていくが、要らなくなったものを削除するということ
が日本にはできていないように感じる。

震災の時に顕になったよう、規範意識は日本人には既に備わっている。だからこそ、簡単なものの方がうまくいくのではないかなと思う。

具体的には、人としてあるべき姿である、「親切でありましょう」、「笑顔でいましょう」、「子供には優しく」、「親を大切にしましょう」といったような事柄。

人間関係の問題がかなり多いと思うので、その部分が大切ではないかなと思う。

●参画者

先の意見に乗るような感じになるが、共助共生というところで、自分を律するという「自律」が、一人ひとりに大事になってくるのではないかなと思う。

前回にも話をしたが、祖母から言われた「念を込めなさい」というような、代々親から子へ語り継がれるような事を言われた時に、自分を律する事ができると思うので、善悪のルールというよりは、規範について記載すべきだと思う。

文化によって善と悪は変わってくるので、人の行動を抑制するものというよりは、ふと思い出して自分で自分を律せられる、親から教えられるような言葉があれば良いと思う。

●おやじ

おばあちゃんやおじいちゃんなど、ずっと同じような言葉で導きを得てきたようなものを、日本国民全体への導きとして表せば良いのではないかと一言することでしょうか。

●参画者

「人を殺すのが犯罪」というルールで自分は律することはできない。
そのようなルールではなく規範が大切だと思う。

●おやじ

行為を直接的に規制をするという立場ではなく、行為の前提となる、心の在り様について考えておきましょうということですね。

●参画者

今はあまり、世界的に見て注目されているかはわからないが、世界的に見て、ルールには宗教の影響があると思う。

キリスト教でも、イスラム教でも、聖典や経典があり、ルールブックみたいな形で、「こういうことはしてはいけない」ということが書いてある。

メジャーな宗教の経典には、生活規範について書いてあることが多く、「こういうものを食べてたら良い」とか「駄目」という、生活に根ざしたものが多く書いてあるように思う。

最近の法律を見る限り、生活規範について記載されていることは少ないと感じる。食生活が乱れると病気になってしまうように、生活上の問題があるからそれを防ぐというルールがあっても良いのではないだろうか。

遠く離れたところに規範があるのではなく、どうやったらうまく生きていけるのだろうと考えたルールや法律はどうだろう。

生活規範が憲法にうまく具合に組み込まれたら良いのではないかなと思うが、教訓など、文章ではなかなか難しいのかなと思う。

●おやじ

身の回りの生活規範を優先的に考えるということでしょうか？

●参画者

一種の教訓のようなものとして、その理由がしっかりした上で存在しているものが生活規範だと思う。経験則から出てきたものや、生活の中の教訓次項など、そのような生活規範が入っていても良いのではないかなと思う。

●参画者

生活規範という話が出てきたので、自分の人生を振り返って、どのような教育を受けて、今まで生きてきたのかを振り返っていた。

やはり、祖母とか母とか、父とか、自分に関わって一緒に生きて来た人たちの言葉や経験則が、現在のワタシたちにも届いていて、そのような教えは、自分もきっと後にも伝えて行くとも思う。

小学校の時は、「廊下を走ってはいけません」という先生に言われていたルールがあったが、当時は、ルールの理由はわからず、「先生が言っているから」という理由で走ってはいけないと思っていた。当時、そういう思考回路だったことをふと思い出した。

「これが大事だ」と教わることもあるが、先人の言葉や教え、知恵から、自分自身で「これが大切だ」と気づくことがとても大切ではないかなと感じる。「自分発信で気付いていく」ということにみんなが向かえるような教えを、教育の中に入れていくことが大切ではないだろうか。

憲法を起草する中で、何を重要視して生きていくのかということについて、一人ひとりが目的意識を持って、哲学的になることが大切だと思う。

校外学習や、自然体験とか、自然を見ていればなんとなく気付けるような四季の変化や、山や川を観て、「水は、上から下に流れるんだ」とか、そのような基本的な事を、自ら気付いていく為の教育や教えが、自然に生活の規範に繋がっているのではないかなと思う。

そこに自ら気付くことが大事な事ではないかなと感じる。

教育でいうと、教科書をつくって、それを読むという事も大切。言語化するのには難しいが、例えば、「廊下を走ってはいけない」というルールを、「何故なのか」と、自分で目的を考えることができるようなものが憲法にあれば素晴らしいと思う。

教えを受け取り、それを自分で疑う事も大事だとも思うし、180度違う方向からまた考えて、新たなその時々的大事なことが見えて来たりなどもあると思う。

デジタルの時代で、今の時代にあった大事なものもあるが、東日本大震災の時に自然とできていた規範や、自然と人の為に動く生き様ように、この先、継承していくべき、無くしてはいけないものがたくさんある。

一人ひとりがちゃんと考え抜いて、自ら考え、答えを導き出したり、そのような人がどんどん後に続いて出てくるような、その為の一文があれば良いのではないかと思う。

●おやじ

今までのところでまとめ。

- 歴史、伝統、神話のようなもの
- 国民全体の集団としての経験的価値観の流れという表し方
- 日本という国はこうやって来たんだよという書き方
- 十七条の憲法、教育勅語のような、一人一人に対しての道徳的な倫理的な在り様

廊下を走ってはいけないよというのは、「授業中に廊下を走ると、他の人の教育に邪魔だよ」⇒「人様に迷惑を掛けてはいけません」⇒「世の為、人の為になることをしなさい」という流れ。

そのような考え方を基準として、個別の行為は、何を為すべきか自ら考えなさい、という考え方もある。

日本の歴史の流れについては、歴史的に日本人が認証してきたものを、認識していくという事。その認識した事から派生して、末端の事象まで推察していくアプローチ。

全部は書き表さず、よりシンプルに書くということは、そのことを言うことによって、末端の事象に派生していく必要がある。それをどのようにしていくのかがポイントかなと感じる。

個々の生活に密着した道徳、倫理なことから、政治の有り様や、司法の有り様までに律していくアプローチをかけるのか？

それとも、日本的枠組みの理解から、個々の規範を推察する仕組みにするのか？

あるいはそれを両方一緒にするのか？など、様々なアプローチがあると思う。

●参画者

致知の最新号の荒谷さんの記事の中で、「日本は今どこに向かおうとしているのかわからないだから乱れている」と言われていた。憲法と呼ばれるものは、ひとまず置いておいて、日本国はどこに向かおうとしているのか、言い表すことができればよいのでは無いかと思う。

「中今」という考え方だと、「こういう歴史があったから、未来をこう考える」という話に結びつくと思う。

会社には社是があるという話があったが、國是と呼べるものを考えればよいのではと思う。國是として、日本國が目指していることだが、國民一人ひとりも、そういう風になりましょう、というものにしていくと、一人ひとりが責任を持ち、自助自立して、調和して生きていけるのではなかとを感じる。

●おやじ

五箇条の御誓文は、國是として明治の時代に作られた。日本國全体のあらすじのような、過去から未来へ貫通する、主要たる根本原理。そういう事を示すもの。

あとは、その末端の事象は、國是から照らし合わせて、外れないようにすればよからうということだろうか。

●参画者

議論を聴いていて、真面目な人が多いと感じる。

皇位継承についての有識者会議は、結論がめちゃくちゃ。そもそも、昭和22年にアメリカ軍が書いた憲法を前提にやっているのでめちゃくちゃになるのが当たり前。

「原則を示す、ノリ、規範は我々にあるのか？」と問われると、「正しく在る」と答える。それは何か。万葉集。

大伴家持は万葉集の最終編集者であるが、彼が私達に伝えるメッセージとしては、万葉集第一巻冒頭の歌に、雄略天皇の夜這いの申込の歌を入れた事ではないかと思う。

「箆もよ み箆持ち 堀串もよ み堀串持ち この岡に 菜摘ます子 家聞かな 告らさね そらみつ 大和の國は おしなべて 我れこそ居れ しきなべて 我れこそ座せ 我れこそば 告らめ 家をも名をも」

一番好きな歌であり、皇室の男系継承の原則が記載されている。天皇が、菜の葉を摘んでいる娘をナンパするような歌だが、もし、この娘が男子を産めば、後の皇后になる。

この歌が何を示しているのかと言うと、日本の全ての女性が、天皇の母になる可能性があるということ。そのような國の体制であるということを示している。

皇位継承について菅直人のアホが、「男系の継承は女性蔑視だ」と言ったが、それは真逆。女王蟻と女王蜂のような世界はともかく、我々日本人や人類は皆、男系の継承しか無い。

菅直人みたいな奴の子供が天皇で、自衛隊は果たして戦えるのか？最近では、小室圭のような輩も出て来たが、女系継承が出るとそのような事が起こってしまう。女性に取り入れるのがうまくて、戦争など、危機的状態になるとすぐに逃げるような奴。そのような輩が横行する。

「我々には万葉集のようなものがあるやないかと。」と言いたい。政府の言う、有識者会議などは一切駄目。何故なら、政府の役人組織も皆、アメリカ軍が書いた憲法で動いているから。

我々は間違っているという認識で、昭和22年に施行された憲法は、憲法ではないという前提で取り組まないと真実に到達し得ない。

その点、ドイツは戦に負けた経験が多いので心得ている。ドイツは、占領された状態で憲法は決して入れなかった。

その代わり、ボン基本法という、法律の基本を取り入れた。ボン基本法には、「占領が解除された後は、占領中に出来た法律は無効とする」と記載されている。これがドイツ。

日本が大騒ぎしているような議論も、議論無しにPKOへ部隊も出すし、ある国が無政府状態になった時、直ちに現地に軍隊を派遣して、ドイツ人のみならず、日本人まで救ってくれた。

ボン基本法に記載されているような、「戦争中にできた法律は受け入れない」という事は真つなことだということを前提に議論したい。

是非、昭和二十二年の憲法の前文を読んで欲しい。悔しくて涙が出る。日本人は12歳以下だという事が前提で書かれている。

「日本国民は日本国の主権者であるが、日本国民による政府は、戦争の惨禍を与える、したがって日本国民は、平和を愛する諸国民の公正と信義に従って我々の安全と平和を保持した」

と書いてある。こんなものを子供達に教え続けている國に未来は無い。

本当の我々の憲法は隠されたが、それを見つけ出す、という思いで取り組んでいきたい。

万葉集というのは、そういう意味でも、既に我が國の憲法だと思う。皇位継承のやり方も書いてあるし、私個人としては、御皇室には側室が必要ではないかと考えている。

選挙でも言い続けて、不利になると言われたが、自分自身の公務なので関係ない。側室は必要。明治天皇も大正天皇も側室の中から生まれた方である。

日本であり、万葉集の國なので、「側室が必要」ということを、前文に書くなどの議論があっても良いかもしれない。

●参画者

話を聴いていて、万葉集の冒頭の歌を憲法の中に入れたら良いのではないかと考えた。

「箆もよ み箆持ち 堀串もよ み堀串持ち この岡に 菜摘ます子 家聞かな 告らさね そらみつ 大和の國は おしなべて 我れこそ居れしきなべて 我れこそ座せ 我れこそば 告らめ 家をも名をも」

菜摘みをしている女性に天皇が声を掛けてナンパする歌で、自分の勉強会で読んだ事があるが、読むと会場の雰囲気がシーンとなってジーンと来た。

「籠を持って、スコップみたいなものを持って、菜をつんでいるお嬢さん、あなたのお家はどこですか？あなたの名前はと言うのですか？この大和という国には私が居ますよ。私の方から名乗ってあげましょうか？私の方から家を教えてあげましょうか？」という歌。

男系継承という意味があったのは、今初めて気付いた。五七調ではないので、元の歌がどうだったか分からないところはあるが、これはすごく美しい。

万葉集の冒頭の歌で、これは本当に美しい歌だなと思っている。こういうものを憲法に載せた方が良いのではと思う。

荒谷さんの講義の中で、毎回と言ってもいい程出てくる、「建國の勅」。これこそ建國理念なので、これもまた憲法なのではないかと思う。これも憲法の中の、最も重要な要素なのではないかと思う。

自分も勉強会をしていると、毎回同じようなものを使う。例えば、古事記の冒頭の部分の「天地初発の時とき」とか、あるいは神武天皇の建國の理念や、十七条憲法の「和を持って尊しと為す」とか、天壤無窮の神勅とか。明治憲法の第一条「大日本帝國ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」とか。

日本というのは歴史が長く、古典の成句を読み上げるだけで素晴らしいなと思う。

民法等、法律の文章を読んでも面白くないし、感慨も何も出ない。やはり、古典の成句を読むと違う。一つひとつがジーンと来る。

天皇の御製なども勉強会で使うが、そのような成句こそが、本当は憲法なんじゃないかと思う。古典のこれは素晴らしいな、と思うものを何個か並べるだけでも憲法になるのではないかと思う。そういう気がしている。

●参画者

万葉集の中には、日本の女性の在り方がとても強いものだったと書いてある。雄略天皇の夜這いの申込を受けた娘の歌が残っている。詠み人知らずで残っているが、歌の内容から推測することができる。

「隠口の 泊瀬小国に よばひせず 我が天皇よ 奥床に 母は寐ねたり 外床に 父は寐ねたり 起き立たば 母知りぬべし 出でて行かば 父知りぬべし ぬばたまの 夜は明けゆきぬ ここだくも 思ふことならぬ 隠り妻かも」

私が起きていけば母親が目覚めるでしょう。父親が目覚めるでしょう。早くやりたいけどでけへんわという歌(笑)。

この歌から読み取れるのは、娘の親の承諾がなければ、天皇と言えども娘の家に入る事ができないという事。

この時代のことを考えると、とてもすごい事。ヨーロッパでも、処女権は領主が持っており、それは領主が神から与えられた権利で、いつでも行使することができた。

日本はそうでは無い。誇りをもって、「我が國は、女性を大切にする民族なんだ」ということを思った方が良い。

●おやし

女性云々に関しては、おっしゃる通りで、相続権から何から何まで女性も平等に扱っている。

万葉集に関しては、個々の和歌も然る事乍ら、天皇の御製と、詠み人知らずという、名もなき國民の歌が、同等に編纂されているということ。これは今の歌会と同じであるが、君民一体の実態のひとつ。

天皇と國民は非常に距離が近いということが表されている。國のお役として相互に認識はあるが、ヒエラルキーが高いとかそういうことではない。お互いが近い関係の中で、各々のお役を尊重しているというところがある。

そのようなことを、その中の和歌を紹介することによって、示すということもあると理解できる。お國柄を示す手段は様々ある。

- 大きなお國柄というものが必要だという理解
- 個々の在り様が必要だという理解

これを考えてもらいたい。憲法だからと言って、一つと限らないかもしれないし、いろんな形態は取り得る。

神武天皇の建國の勅には、

- 歴史的にこういう事を重視している、という言い表し
- 國民の幸福は～であり、目的とするところはそこである、という言い表し
- 天皇というのは、一体何をされていて、國民には何を期待しているのか
- 最終的にどういうことを共に成し遂げたいのか

上記のようなことが書いてある。

勅や和歌から読んで行く時には、中身も然る事乍ら、「何を示すことによって、ご歴代の天皇陛下は勅で國民に問いかけたかったか、言い表したかったのか」という事を読み解くことにより、規範の参考になるのではないかと思う。

十七条の憲法、五箇条の御誓文も、教育勅語も、全て勅であり、詔勅。

そう考えると、我が國の國体法の構造というのは下記のようにになっている。

●神勅 ⇒ ご歴代天皇の勅 ⇒ 諸國民の慣習法

足りない時は、それぞれの時代に合わせ、格式や、式目という形、あるいは 近代になると大日本憲法という形態をとったこともある。

それぞれの時代の、それぞれの事情で、細々とした規定は必要だろうが、國体法の全体構造として、常に一貫しているのは、「神勅 ⇒ 勅 ⇒ 庶民の生活慣習」という枠組み。このような枠組みを憲法で示すということもあるのではないかと思う。

「神勅」、「勅」は、國としての立場の一つの在り様。「社会慣習」というのは、人々の日常の生活の在り様から、我々が経験則に基づき決めて来た事。

この両方を、うまく具合にセットできないかという感じがある。

例えば、(西洋的な側面は個人的には好きじゃないが)大日本帝國憲法は非常に優れており、國の在り様をばっと抑え、定義してある。しかし、それによって國民個々の慣習が壊されるという事態が起きた。

「個々の慣習法は守られなかった」ということになり、ここは非常に致命的なところ。かと言って、個々の慣習の全体的な集合体が日本國というのも、千代に八千代に営み続けられるかと言われれば、そこも疑問が残る。

全体の在り様というのも不可欠であり、かと言って個別の慣習的規制まで壊しては、そもそもの國民の生活のベースが無くなってしまうのではないかと思う。それをどうするか？その辺りのご意見も聴きたい。

●参画者

それは、明治になり、法律を全国に行き渡らせるようになり、画一的になって、個々の慣習が潰れることになったということでしょうか？

●おやじ

明治天皇はそれをご心配され、市町村制を設置する法律が出来るとき、詔勅を出している。明治天皇の勅の中には、「急速なる発展のために、我が國の美風である隣保團結の絆が、著しく壊されていっている事をとても心配している」という事柄が書いてある。

廃藩置県などで、中央政府が地方全体を自治するようにまで力を及ぼした弊害を言っており、昔ながらの隣保團結の美風を残すために、市町村制を導入しますという勅である。

その勅の中で、「庶民がそれぞれの地域で大事にしてきた慣習も必要だ」ということをお示しになっている。

大日本帝國憲法ができたのは、明治の後半。明治の半分は、憲法が無くても國を運営できていたという事になる。

作らないと、欧米諸國から「憲法も無い野蛮な國だ」ということで、平等たる扱いをされない為、作らざるを得なくて作ったということがあったが、そもそも無くても充分に國家は運営はできるし、実際にできていたということ。

今の現況から、その状態に戻っていく時に、何も障害無く、すぐそこに行き着けば、めでたしめでたし。しかし、そこに向かう、あるいは日本人の共通意識の中で行くとした時に、何が最小限必要で、何を大事にするのかということを話し合う必要がある。余計なことは必要無い。

何かの文言ではなくて、さっき言ったように、「ご歴代の勅にはとても良いことが書いてあるので、それは国民みんなて大切にしていきましょうね、地域で習わしとして教えて来ていることは、きっと大切なことだろうから大切にしていましょうね」というような事でも良いのではないかと感じる。

それで本当に良いかどうかは、私は分からないので自由に議論してもらいたい。

これまでの皆さんの意見では、

- 国全体の事として流れはちゃんとしておかないといけないねという意見
- 国民全体の共通認識として、これは知っておかないといけないよということを書いた方が
良いという意見
- 常に日常的に念頭において生きるべき、日本人だったらこれぐらいの常識で生きていこう
よというような事が必要という意見

上記のようなことがあったかなと思う。

●参画者

お話を聴いていて個人的に思ったのは、現憲法によって、現皇室の扱いが、ぶっちゃけ言うと家来のような扱いを受けている感じがした。

新しいものをどうするかは別として、天皇陛下は憲法というもの以前に、神勅があって、そのもとで動かれているということを、国民全体が感じることから始めないといけないのかなと思う。

それに縛られるとかではなく、我々臣民が、信頼関係でどう生きていくかということではないか、とずっと思っていた。前文に入れような文言として、そのようなことが必要かと思っている。

●おやじ

当然だが、天皇を始め、御皇室について、どういう共通認識を持つべきかということも必要であり、認識は持ってはいるのだが、今の憲法がある故に、本来の、天皇や御皇室の在り様ではない考え方で混乱をしている。それを除いて、天皇と御皇室に対して、当たり前だとして執り行われてきた事を、そのままに理解するということは大切ですよねということだろうか？

皇室には、皇室限りの伝統慣習がちゃんとあり、それは、現憲法下でもあることはある。しかし、憲法的な解釈で、政治的な力が働くので、非常に困惑をきたしているのが実態。

上皇陛下は、譲位をお話された、8月8日の勅の中で、現行憲法の天皇の規定、象徴天皇をどのように理解されているのかをしっかりと話された。勅をちゃんと読むと、決して現憲法の趣旨に在るものではない。

伝統的天皇の在り方として、天皇陛下は「象徴天皇」という現行憲法の言葉をあてておっしゃった。明確に言っているのは、「國事行為ではなく、天皇が勝手にやっている行為そのものこそが、天皇の本来の役なのだ」と明確におっしゃっている。

天皇陛下は、決して現憲法の下に入っていないのだけど、ただ、政府がひたすらにそのような態度を取るので、國民は「そうなのかな？」と錯覚を起こしているのではないかと思う。

更に言うと、現憲法を無視して、ちゃんと譲位を執り行われた。これは、完全に憲法より天皇陛下の方が上位にあるということをお示しになったということ。國民が、「天皇陛下がきちんとお示しになれば、憲法はなくても良いのだ」という事をわかれば良い。それを混乱をきたさないように進めましょう。ということ。

今のような世俗法よりは、天皇の発する勅の方が上に在る。世俗方と天皇のお言葉は違うのであれば、勅が正しいですという判断基準が必要で、それが國の有り様。

建武の中興にしても、大化の改新にしても、政治体制の否を、天皇の一言で変えてきた。明治維新もそう。

天皇の勅一つで政治体制を変えてきた。少なくとも、それで改悪になったなんてことは一つもない。

それは何故かという、天皇は神武天皇の霊をお宿りになっており、「民（おおみたから）に利（くぼさ）有らば、何ぞ聖造（ひじりのわざ）に妨（たが）わむ」という神武天皇の意思を重んじているので、國民の幸福にならない事をおっしゃるはずがない訳である。

今の憲法があることにより、わからなくなっているもので、そういうのはやめておいて、わかりやすくすることにより、國の有り様の一つが見えてくると思う。

今回の資料「國民典範」というものを渡した理由は、十七条の憲法でも、「勅が出ればそれに従え」と書いてあるが、國民がどのような心情で日常を暮らすべきかというものがあつた方が良くと思ったから。

ちなみに、現行憲法では、「基本的人権を意識して暮らせ」と言われている。「権利を主張して暮らさない」と現憲法で教育している。そうするとあまりいい社会が出来上がってこない。

そうじゃなくて、「國民が意識すべきことは一体何なのだろうか？」ということも、何らかの形であつた方が良くのではないかと思う。

それを今から作らなくても、戦後はちゃらにしまったが、國民教育として優れており、評価の高い「教育勅語」がある。

十七条憲法でも、「今見て問題がある箇所があるか？」と言われると、問題を見つける事自体が難しい。どこを見ても、「そうだね」ということが書いてある。

改めて作らなくても、既に在るもので、「これだ」という言い方も当然ある。もし、改めて作るとなり、本当に新しいというものであれば、「革命」になってしまうので、やるのだったら、今までのことを今の人にわかりやすくする工夫が必要かもしれない。

基本的には、我々が「大切だ」と思って来たことを、再認識することすればよいのではと思う。

それは、国としてのことと、おばあちゃんの言葉のように、代々言われ続けてきた教訓・家訓のようなもの。その家の教えとして「人様に迷惑を掛けてはいけない」などと言われて来た事が、日本では、国から命ぜられた訳でも無いし、法律に書いていたわけではないが、ほぼ共通している。ここが日本人の強み。

各家で伝わって来た事を、みんなが自覚しなすと、それが国民の共通意識になると思うし、ほとんど差異はないと思う。そのようなことを共通認識にしようよ、ということが大切なのではないかと感じる。

●参画者

お話を聴いて、建國の勅でも良いのでは無いかと思った。

「八紘(あめのした)をおおいて宇(いえ)と為(せ)んこと、またよからずや」

という、「天の下に一つの家を創るということを達成する努力をしている事がよい社会なのだ」ということを知って、この言葉は、國の在り方も説明してあるし、家督制度や、政治的なルール、家を持続けて行くためにはどういう制度が必要なのかという制度の話、そして、一人の個人として家を大切にする生き方や、家を持続けていく生き方についてもヒントがあるように思う。

國の在り方も、システムも、作るべき制度も、國民の在り方にも、全てに繋がる言葉になっているなと思った。

こういう言葉を一所懸命探していくと、國の在り方も、國民としての在り方も、政治だったり、諸國の関わり方も、紐付いている言葉が歴史の中で見つかるのではないかなと思った。

●参画者

同じようなことを考えていた。「八紘為宇」。

「國として目指している」という大きな思いがあったからこそ、家の事を意識したり、近所の人と争わず仲睦まじくすることを大事にしたりできたのではないかなと思う。元々の建國の理念が、教えや家族の掟に繋がっているのだと感じる。

國として目指すべきことに関しては、「國民仲睦まじく、時には助け合って、時には厳しく、発展していく」という思いがあって、その中に、理念として、教育勅語など、「人として」というところも入れた方がよいのではと思う。

理想を実現する為の、日本人・人間としての心構えが、教育勅語のような形で表してあればわかりやすいのではと思う。

心に響いて、ずっと空でも言えて、「これってこういうことなんやで」と、説明もわかりやすくしたら、規範として自分にも浸透しやすいし、子供達にも伝えることもしやすいので、良いのではないかと思う。

●参画者

私も同じような事を考えていた。「確立した詔勅、及び御製は、これを憲法とみなす。」という一文を入れた方が良いのではと思った。

イギリスは、立憲主義と言われているが、憲法という名前の法律はない。憲法という名前の法律は無いけど、憲法のようなものは在るということ。

マグナカルタとか権利の章典とか、色々な、その時々に出てきた宣言であったり、条項であったり、それが積み重なってできたものが憲法なんですよということになっている。

今までの歴史の中で出てきたものが積み重なって、その中で憲法的な役割を果たして来たのが憲法だということ。それは、イギリスではOKで、日本では駄目なのか？

日本は、日本国憲法以外は憲法と認められない。十七条憲法があるじゃないかと言っても、それは憲法ではないとなる。それは何故なのか。

日本国憲法の前文に、日本国憲法以外を憲法とみなさないと記載されてしまっている。凡例法的な積み重ねの詔勅や、その時々で作ったものが、全部意味がありませんとなってしまっているのが現日本国憲法。

仮に「確立した詔勅、御製はこれを憲法とみなす」という言葉を入れたとしたら、法律家としては、「確立した御製ってなんだ」、「確立した詔勅ってなんだ」ということを議論しなくてはならない。

「何が確立した御製なのか」、「何が確立した詔勅なのか」と議論して争う。その中で、例えば十七条憲法はどうなのかとか、建國の勅とか、あれが確立しているのかなど、それが憲法なのかどうなのか、と、詔勅集を作らなければならない。

詔勅判例集を作って、それに一個一個憲法としての意味を持たせると現行憲法との整合性はどうなるのかとか。そこでいろんな詔勅に光があたって、近代以前の天皇の言葉が、法律と同程度の意味を持ってくるかもしれない。そうすると面白いかなと思って発想した。

●参画者

今、ぐちゃぐちゃにされてしまった國民性がある。この近年で情報化が進み、いろんな情報を手に入れる事ができる。

捻じ曲げられた情報があり、「天皇って必要なのか？」ということにまでなっている。

国防の中に、しっかりと入れておきたいのは、例えばA級戦犯として決められているが、日本國內では日本國民の総意で決めますということ。

そういうような、外から入って来るものを、日本国内ではしっかりと議論する。総意で決めたということであれば、当然歴史の教科書に載っていたりすると、正しい事だと認識できるが、ぐちゃぐちゃな場合、自己判断できず、例えば、今の憲法で戦争はあかんとなっているので、戦争したらあかんやん、となってしまう。

しかし、実際戦争をしなければならなかった理由があつたりするので、国防としてのことは衆議で決めるという事を入れたい。

キリスト教が入って来て、それが正しいと言われていたときも「自分の父親はキリスト教を知らなかったから極楽浄土に行けない。一緒に所に行けないのであれば必要無い。」という人がたくさん居り、普及が進まなかったという話もある。

不必要な情報が入っていなかったということと、親のことを信じているから普及が進まなかったのかなというのは、正しいと思う。

今は、間違った、訳のわからない情報が多いので、日本国内の事に関しては衆議で決めるということがあればよいかなと思う。

●参画者

不文の憲法と成文の憲法の違いが出て、イギリスの例が出たので申し上げておくと、我々は日本こそ、不文の憲法だと認識したほうがいいと思う。

イギリスでは、マグナカルタが中心だが、それは1,215年。日本では御成敗式目が出来たぐらい。

我々の不文の憲法の法源は、それから2,000年ぐらい遡るんだという、とてつもない國だと思った方が良い。

●参画者

憲法に入れる言葉は浮かんでいなく、和歌とか良いなと感じた。

この日本が良い國だなと認識する祝日祭日は、年2日ぐらいしかなく、日本の歴史を祝う日も少ない。そのあたりを見直していく事と、1年365日という枠組みも見直して、祝日も新しく作れば良いと思う。

また、主権を回復する日を祝う必要もあると思う。現行憲法が、主権が無い時に作られたということで、その日に教育もできると思うので、四季のある素晴らしい日本の中で、祝祭日をもう一度見直していけたらと思う。

そうすると、「明治の日」も、明治の勅をその時に子供達に伝えることができるし、日本国民もその事について考えることができる日になるのではないかなと思う。

●おやじ

祭日法。祭日というのは国民の日常の中での大事な行事。戦後、言葉を全部入れ替えられてしまった。祭日が廃止になりそうになった時に、かろうじて残す為に、やむを得ず言葉を変えたという経緯がある。

言葉を元に戻せば、意味が先ずわかるようになる。勤労感謝の日とか、誰に感謝するのかということもわかる。また、新嘗祭も漢字を見るだけでわかる。

祭日に限らず、国民が日常でやって来ていたことを、日常に取り戻すということが大事な事。ただ、それは憲法において、何をどのように言ったらそれがそのようになるのか、という辺りを踏まえる必要がある。

個別の事象というのは、全体的な大きな考え方の中から下りてきて、行き渡るようになるものなので、日本人が昔から執り行ってきた生活の中の、非常に大事な行事は、必ずこれからやるようにすべきだし、家の作り方なども、ものすごく日本人の日常の価値観や習慣に関わってくることになる。

なので自分たちで復元できるようなコンセプトを作っていくことは大事だと思う。

●参画者

今までの話を聴いて、やはり過去から学ぶというか、思いをつないでいくということ。歴史だったり伝統だったり、今までの先人達の思いを振り返ることは大事だと思った。

憲法というものも、今の憲法の前文を知っているか？と言われれば、知らない。

既存の憲法より、家で親から言われた言葉の方が心に残っている。そういった、昔から続いて来ている事もたくさんあるので、どんどん遡っていけば、真の日本を表すことができるのではないかと思った。

●参画者

良い方向性の話を聴かせてもらえて、是非まとめて頂きたいと思う。

日本は大和(だいわ)の國。大きな平和。次元の大きな高い平和を目指している。その中心が天皇陛下。西洋のキングとかカイザーとか、権力者、支配者とは違う。弱肉強食の世界を大いに超えて、互いに結び合って助け合って、農業や自然に従事する國だと思う。

子供も意味がわからなくても口ずさめるような言葉が見つかるかなと思う。
万葉集などは参考になると思う。

●参画者

憲法を起草する会に参加させてもらっていて、自分の中にあるのは、教育に関する勅語。明治二十三年に施行され、復古主義に基づき、神武天皇の時代に戻るという事で制定された。

教育勅語の中に「我が臣民」という言葉があるが、臣民という概念は支那にはない。支那は、臣と民と君。臣と民なので、臣民という概念が先ずない。

教育勅語の中に「一(イツ)にして」というのが2箇所出てくるが、一つにまとめる原理はなにか？教育勅語の中では、それは、忠孝と武である。我が國で一にする原理は忠孝であるということ。支那の儒教圏では、忠と孝は両立しない。

儒教では、君臣の関係を義合(ギゴウ)としている。義兄弟を考えてもらったらわかると思う。

我が國では、親子兄弟の関係を天合(テンゴウ)としている。元々決まっている。垂加神道的には、皆予め決まっているんだということ。

支那のように人間同士で決めた義合ではなく、最初から天命で決まっている天合だと考えている。

行動規範をどうするかということと言うと。先祖のやった事をやるということが良いのではないか。復古主義なので、先祖のやった事で考える。親父がどう考えたのか。祖父がどう考えたのか。近しい親族でもいいし、歴史に遡ってもいい。

合わせ鏡で、報本反始、はじめに帰る事が大切。自分たちに何か問題が起きた時に、先祖だったらどう対処しただろうか、と考えることが復古という概念。

自分のような復古主義者としては、自分達には明日は無く、どの時代に返るかという事。古を考え、今を考える。古を考えるには、古事記以前の事を考えて、「中今」の古事記編纂の時代のよな今を目指す。風況が乱れているから、ここで風況をもう一度考えて古を考えて今を照らす。

古事記編纂の時代からそういうことを言っており、復古主義は個人の行動倫理にも叶うし、民族全体にも叶うと思う。

我々は家族であり、共同体国家なのだということを、教育勅語はうまく近代につなげて説明しているのと思うので、教育勅語は憲法起草の骨になればと考えている。

●参画者

皆さんの意見は色々難しいことばかりで、自分でわかることを噛み砕いていくと、おばあちゃん子だったが、いろんなことを躰けられる時、「これ誰の為なん？」とよく問いかけられていた事を思い出した。

そして、「誰のための役に立つのか」という事をやっと今になって考えられるようになった。

話は逸れるが、ここに来る前に、ある人の家に行ってきた。たまたま集落の人に頼まれて処分した物が、その人の物だった。その人の使いつぱしりみたいな人が家に来て、「返してくれ」と言われて、「処分した」と伝えたら、「10万円もってこい」と言われた。

誰の為なのかと思って、ピクツとなったが、たまたま電話があって、大阪で会う事になったが、お金を払う事もなく、お互い良い形で終わった。

その人と話しながら、「この人の為になるにはどうしたらいいかな」と話を聴きながら思っていた。

法律とか、難しいのはわからないが、誰かが何かをするときに、「誰の為なのか」ということを考えたら、世の中うまくいくんじゃないかと思ったが、うまく法律に載せるような文言が思い浮かばなかったなので、まとまりのない例え話をしてしまった。

自分の為ではなく、先に生きる人の為と考えれば、それを受け継いだ人も、この先の人の為にと考えてくれれば、全て円滑に進むのではないかと思う。

文言を作らなくても、「それ子供達の為にならん」と直感で思えるものがあれば、自分自身も有り難いと思った。

●参画者

おじいちゃんおばあちゃんから聴かされていて、今になってわかる言葉のように、「こういう事が大切だな」と自然に感じ取れるような言葉が良いと思う。

文字として読んで理解することも良いが、体感として気付けるような事が何かできたらいいなと感じている。

昔、おじいちゃん、おばあちゃんは「漢字も書けんかったけど、酒飲みながら機械を回せて幸せや」と言っていた。そんな雰囲気、ずっと伝わっていければ良いなと思う。

今を生きる自分もそうであるし、これからを生きる若手の人も、大切と思える何か体験して、「やっぱいいなあ」、「楽しいなあ」と感じれるような事ができたらいいのではないかと考えていた。

●参画者

はじめて参加。憲法なんて読んだ事も無いが、皆さんの話を聴いて、そうやなあと思うこともあれば、そんな事は大事では無いなと思うところもあった。

自分は62歳だが、文字に表すことで、勇気づけられるような、そういった文字が良いと思う。

個人的には、「どんな事があっても負けない」という強さ、男として家族を護るという心意気を伝えていかないといけないなと思った。

自分の父親は大正9年の生まれで、厳しく育てられた。そういう厳しさを通して、気づいた事もある。学校の先生などはこういったことを教えていないのではないかと思うし、今の政治家を見ていても、芯がある政治家は居ないのではと思う。

皆さんの意見を聴かせてもらいながら、今後、思うことを発言させてもらえたらと思う。

●参画者

詔勅もいいなと思ったが、家にある勅集の本を思い返すと、現行憲法と同じぐらい分厚さがあって、読む気が無くなる人も居るのではないかなと個人的には思った。勅集の中から、個人的な好みだけで「これいいよね」とチョイスするのも、個人的な感性によって左右されるので避けたいと思う。

東京の憲法を起草する会で、皇室典範を研究したが、天皇陛下の祈りというのが歴代を続いていて、国民の一人ひとりの平和と安寧を常に祈られているというところがあるので、祈りに応えられるような国民性を育めるようなものが出来たらいいと思う。

●参画者

自分は、幼少期から学歴がなく、生きていく為に、ただ働くだけでは間に合わず、経済活動として商売を19歳から初めた。

今の在るべき姿を、正しいと思わないと生きていけなかった経験がある。価値と価値との交換を目的として、利益を追求して、オムツかったり、ミルク買ったりしてきた。

その中で、やっと40歳になって、ふと振り返った時に、不安と怖れが出てきて、勉強を始めるようになった。感じるのは、残りの人生、何に時間を費やすのかということ。子供、孫が日本人として、幸せ過ごせるよう、道徳や倫理を学んでいけるようにしていきたいと思う。

天皇陛下が国民の幸せを願ってくれているが、自分自身が、幸せになれる行動をとっているのかと問いかけ、最近、やっと早起きをして、5時からラジオを体操をしに行ったり、正しい価値観を実践できるようになって来たと思う。

誰の居ない赤信号でも、誰が見ていなくても渡らないという選択ができる人間になってきた。

変わっていかなければならないことと、変わってはいけないこと。しっかりと見極めれる、国のリーダーが出てきてくれたら良いのではと思う。日本人として正しい道を歩んで行ってくれるような教育を進めていきたい、

●参画者

細かいところは違っても、大枠は一致しているということを確認できたことが嬉しい。ただ、逆に、1億2千万人居る日本人の中で、こういった話題に対して関心がある人ってどのぐらいいるのか疑問に思った。そういった方々に、どういった言葉が伝わるのかと考えていた。

皇室が大事というのは少数派なのかなと思った。個人的な意見としては、家族は大事という人は結構居ると思うので、教育勅語のようなものを憲法として明文化できれば伝わりやすいのかなと思った。

●参画者

皆さんの話を聴いていて、浮かんで来た事が「モーゼの十戒」。
正しいかどうかはわからないが、十の戒めとは、「嘘ついたらいかん」、「人を殺してはいけない」、「人の物を盗ってはいけない」と、人間としてごく当たり前の十の戒めだった。

モーゼの十戒は世界的に有名な事なので、すごい事が書いてあると思っていたけど、当たり前の事しか書いてなかった。

日本人の心として、モーゼの十戒というのは、宇宙のノリというか、天の法則というか、人として、一番単純で当たり前、しかし、すごく大事な事では無いかなと思う。

新しい憲法を作るとき、モーゼの十戒をマイナスのことではなく、プラスにして頭に入れて作ったらどうかと思った。プラスのことって何なんだろうと問うた時、「忠」、「義」、「孝」、「仁」のように、人として大切な心のエッセンス。

モーゼの十戒の反対として、プラスのエッセンスとしてそれが存在して、心に基づいて教育や政治、いろんな分野に行き渡って、よいものが作り上げられたら良いのではないかなと思う。

一つひとつ定義付けしていたら、難しい言葉になるので、その辺りを和歌にして、「忠」だとしたら、「忠」について歌った和歌などはどうだろうか。

プラスのエッセンスがあって、細かい事に波及していけばよいのではないかなと思った。

●参画者

二回目が終わって、三回目の今日を迎えるまでに、色々と考えたが、「こうしたら」、「ああしたら」という以前に、どこから考えたら良いのか迷っている自分が居る。

「これを守らなければ生きていけない、死んでしまう」というような事が基準として、人類、世界中の人達の行動規範が決まっているのではないかなと思ったが、日本では、どこに居ても食べ物があって、生きることには困らないからこそ、八紘為宇や、美しい和歌が生まれたのではないかなと感じた。

徐々に考えようと思っているのは、そういう中で、「足るを知る」ということ。

自然の中で生きていく、それに逆らうような者とは戦わなくてはいけないということも念頭に置きながら、皆さんの話を聴いていきながら考えていければと思っている。

●おやじ

一通りご意見を頂いたので、今日はこれで終了。

次回は、我々日本人の祖先が知らせてくれている、和歌や十七条憲法のような、「こういうものは国民全員が共有すべきではないですか」というものを1点で良いので、持ってきてもらいたい。

十七条憲法や、御成敗式目のような、法律に関わるものでなくてはならないということではない。

万葉集の歌や、家訓でもあるかもしれないし、武士が掲げた武士道であるかもしれないし、なんでも結構。

「こういうものは日本人として、極めて日本の在り様を共有していくのによろしいのではないか」と思われるような資料を1つ見つけて、持って来てもらいたい。

具体的な議論へ取り掛かる一つのトリガーになるので、こんな感じこんな感じという中から、これを一つの事をベースにやっていくというようなもの。

勉強が嫌いな方も持って来て欲しい。持ってくる以上はきちんと読んで来てもらいたいし、そういうものを紐解きながら、この先、具体的にしていきたい。